

相互行為の人類学

「心」と「文化」が出会う場所

高田 明



人と人が関わるとはどういうことか

科学的な手続きで「心」の問題に取り組んできた心理学と、
今まさに生きている人々に注目して「文化」を理解しようとする人類学。
両者を架橋し、人間理解のあらたな地平をひらくアプローチの手法と魅力を、
フィールドワークの実例をとおして生き活きと伝える入門書。



相互行為の人類学

「心」と「文化」が会う場所

高田 明

新曜社

はしがき

南部アフリカの真ん中に大きく広がるカラハリ砂漠。日中はちりちりと熱いカラハリの砂は、夜になると冷気を吸い込んで心地よい。この砂の上で人生の大半を過ごすサンのもとで、私は1990年代後半から人類学的な調査をおこなってきた。

サンは、南部アフリカの狩猟採集民として知られる。もっとも現在では、狩猟採集民というカテゴリーが彼ら・彼女らについて語るうえで適切かどうかが問われるようになってきている。実際、サンはいくつもの地域・言語集団からなり、その多くは現状ではほとんど狩猟採集活動をおこなっていない。私が調査をおこなってきたガイ、ガナ、クン、アコエといった地域・言語集団の社会も、その内容や程度の違いはあれ、急速な変化や再編の渦中にあることは論を俟たない。さらに最近の人類学では、狩猟採集、牧畜、農耕といった生産モードの違いに依拠して人間性を語る議論にはすべて本質主義というレッテルを貼り、これを拒絶する動きが優勢である。

だが、日本や欧米の街中に生きる私たちと比べたならば、サンの人々がいまも太陽の運行や月の満ち欠け、それとともに移ろう野生の動植物とはるかに密接に関わりながら過ごしていることは疑いない。サンの人々と暮らすなかで、私はこの関係の内実に思いをめぐらすようになってきた。

私が現在勤めているのは、京都大学のアジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)という大学院である。この大学院の前身(当時は人間・環境学研究科の一部だった)を修了し、2年間の研究員生活を経て、古巣に奉職するようになった。

人類学に「転向」する前、私は心理学を専攻し、関西で発達相談員の見習いとして、乳幼児の発達の診断や療育に携わっていた。そのせいかサンのもとに赴きはじめると、まずサンと日本の乳幼児の違いに目が向いた。いま見直すとたいへん未熟な私の博士予備論文(修士論文に相当)には、次のような記述がある。(1)サンの乳児は首が座る、膝を崩さずに体重を支える、といった姿勢・運動発達を示す指標を達成する月齢が早い。(2)また、乳幼児は早くから子ども同士でさかんに身振りなどを用いた非言語性のコミュニケーションをおこなう。ひんぱんにおこなわれる踊りや密接な接触はこうしたコミュニケーションの場を提供している。(3)いっぽうで、幼い子どもたちは言語を理解するのに十分な年齢に達しても、日常生活ではそれほど多く言葉を発していないようにみえる。

(3)については、私の現地語についての理解の不足、それにとまなうラポールのとり方のまずさの影響が疑われた。そこで乳幼児の言語に関わる調査は、より緊密な関係ができるまでやらないことにした。

それから約20年経ち、幸いにも、私はいまもほぼ毎年のように南部アフリカにフィールドワークに赴くことができている。おかげでサンの人々との関係はずいぶん密になった。ところが、上述したような、領域に分けて発達を理解しようとするモチベーションは雲散してしまった。少し言葉を補おう。こうした議論では、子どもの側に属する「能力」の存在を前提としている。だが、現在の私はそうした個人主義的な能力観にさまざまな疑問をもっていて、そこから先に足を踏み出せないでいる。

代わって私は、サンの子どもとその周囲の人々が日常的におこなう行為の機微を丹念に分析していくことに魅了されるようになった。一つひとつの行為がどのような環境的・身体的・社会的な資源を利用しておこなわれ、どんな文脈を形づくるのかを、できるだけその相互行為に参加している人々の視点によりそいながら解きほぐしていくのである。本書で相互行為の人類学と呼んでいるアプローチだ。心理学の世界で繰り広げられている日進月歩の議論に貢献するためには迂遠な道だろう。そのいっぽうで、サンの子どもたちの日常生活においてリアリティを構成する「意味」の振る舞いをとらえ、さらには冒頭で述べたような、子どもたちの生活とそれを取りまくユニークな環境の関係を理解するためには、かなり有効な手法ではないか、とも思う。

本書は、このアプローチの特徴とおもしろさを、初学者にもわかりやすく伝えることをねらって執筆したものである。執筆にあたっては、コピーライトなどの都合もあって、執筆者自身のフィールドワークにもとづくデータを多用することになった。したがって、相互行為の人類学が報告してきた研究の成果を網羅的に示したのではない。しかしながら、地に足の着いた事例の丹念な分析は、凡百の抽象的な比較や考察を凌駕するというのが人類学のもっとも基本的な教えの一つである。また筆者自身のデータを用いることで、本書はいきおい、私の研究者としての曲がりくねった自己形成の変遷を反映するものになったと思う。本書のどの部分でもいい。同じような疾風怒濤の渦中にある方々が、まだはっきりしたかたちをとっていない「何か」を見つめ直すきっかけとなれば、これに勝る幸せはない。

ASAFAS では、5年一貫の博士課程のうち1～2年間はアジアやアフリカのさまざまな地域でのフィールドワークについやす。したがって広義の「異文化」の研究は必須だ。研究科全体では150人ほどの大学院生が、それぞれのフィールド経験を理解し、人に伝えようと日々苦悶している。国や研究科の枠組みを超えた交流も盛

んである。たとえば、留学や訪問研究というかたちで ASAFAS と海外の研究機関を行き来する人の数はじつに多いし、文学研究科の板倉昭二さんや教育学研究科の明和政子さんと共同運営している赤ちゃん研究員制度〈https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/~sitakura/infant_scientist.html〉は大きな成果をあげてきている。

もっとも上述の大学院生のなかで、心と文化の関係にまつわる問題に取り組もうという者は、いまのところかなりの少数派である。研究分野が確立する歴史において、科学的な手続きを採用して「心」の内実を再定式化しようとする心理学と、いままさに生きている人々に注目して「文化」の全体を理解しようとする人類学や地域研究との間では、異なる問題系が発展し、住人の棲み分けがなされてきたことが影響しているのだろう。しかしながら、これらの研究分野の境界は、その成り立ちの初期にはいまほど確固たるものではなかった。自らの五感を総動員してこの高くそびえ立つ境界に向き合い、その両側をもっと自由に行き来できる道をつくりたい。まだ妄想の域を出られていない試みではあるが、一緒に取り組んでくれる人が増えてくれれば、と思う。

目次

はしがき i

第1章 相互行為の人類学への招待 1

- 第1節 はじめに 1
- 第2節 人類学と心理学の関わり 2
- 第3節 内容の概要 4
- 第4節 本書の成り立ちについて 6

第2章 理論と方法 10

- 第1節 人類学における4つのアプローチ 10
- 第2節 文化人類学・言語人類学の特徴 11
 - 1 社会・文化の研究を行う 12
 - 2 フィールドワークを通じた参与観察を主たる研究手法とする 13
 - 3 実践者の視点から社会・文化を理解することを目指す 15
- 第3節 相互行為の人類学の射程と手法 16
 - 1 特徴づけを正当化する2つの解決策 17
 - 2 相互行為の人類学で用いられる記号 19
 - 3 基本的な分析概念 21
- 第4節 まとめ 24
- 第2章についてのQ&A 25

第3章 社会的認知 29

- 第1節 民俗分類 29
 - 1 分類は文化である 29
 - 2 東アフリカの牧畜民ボディの色・模様分類 33
- 第2節 在来知への相互行為論的アプローチ 37
 - 1 在来知をめぐる諸問題 37
 - 2 ギイ／ガナの生活様式 38

- 3 ギイ／ガナの道探索実践 41
- 4 ブッシュで道を見つける 46
- 第3節 まとめ 47
- 第3章についてのQ&A 47

第4章 他者理解 52

- 第1節 人類学者の懊悩：他者の理解は可能か？ 53
- 第2節 懐疑主義を超えて 54
 - 1 カラハリ論争と先住民運動 54
 - 2 大型類人猿と基本的人権 56
 - 3 根本的経験論と相互行為論的アプローチ 57
- 第3節 ギイ／ガナの道案内における相互理解の達成 58
 - 1 ランドマークとしての樹木 59
 - 2 スタンス、同意、相互理解 64
- 第4節 人－チンパンジー間相互行為における相互理解の構成 65
 - 1 チンパンジーの認知的能力、コミュニケーションの特徴 65
 - 2 飼育下における人－チンパンジー間相互行為 66
 - 3 チンパンジーの社会再考 83
- 第5節 まとめ 84
- 第4章についてのQ&A 85

第5章 発達と社会化 88

- 第1節 養育者－乳児間相互行為における社会システムの形成 89
 - 1 リズムと調節の共有（誕生～） 90
 - 2 注意の共有（2カ月ごろ～） 92
 - 3 記憶の共有（8カ月ごろ～） 93
 - 4 シンボルの共有（14カ月ごろ～） 95
- 第2節 社会化に対する相互行為の人類学的アプローチ 96
 - 1 行動の相互調整における文化的基盤 97
 - 2 養育の複合的文脈 99
 - 3 養育活動におけるリズムの共同的な創造 103
 - 4 共同的音楽性と発話共同体 105

- 5 養育者-子ども間相互行為における「文化」再考 110
- 第3節 誕生前の言語的社会化 111
 - 1 妊娠をめぐる家族コミュニケーション 112
 - 2 家族コミュニケーションの資源としての妊婦の身体感覚 114
 - 3 妊娠期における家族関係の再編 118
- 第4節 まとめ 120
- 第5章についてのQ&A 123

第6章 言語とコミュニケーション 126

- 第1節 文化相対主義の隆盛 126
- 第2節 相互行為の人類学における言語とコミュニケーション 128
- 第3節 米国における依存性ジレンマ (Ochs & Izquierdo 2009) 132
- 第4節 「思いやり」の実践 135
 - 1 養育者による行為指示：直接-間接性の次元 137
 - 2 養育者の行為指示に対する子どもの応答 149
 - 3 日本の養育者-子ども間相互行為における文化的な特徴の再検討 154
- 第5節 まとめ 157
- 第6章についてのQ&A 158

第7章 感情 162

- 第1節 小説における感情 162
- 第2節 感情研究における4つのアプローチ 165
- 第3節 間主観性 (intersubjectivity) の基盤としての感情 168
 - 1 初期音声コミュニケーションの研究 169
 - 2 初期音声コミュニケーションにおける音楽性 171
 - 3 サオ・カム (“あやす方法”) 172
 - 4 IDSの詩化 179
 - 5 初期音声コミュニケーションと感情 186
- 第4節 会話に用いられる感情語彙 188
 - 1 東アジアにおける「恥」の文化 189
 - 2 日本語のCCIにおける「恥ずかしい」 192
 - 3 「恥」の文化論再考 201

第5節 まとめ 202

■第7章についてのQ&A 204

第8章 結論にかえて 207

第1節 各章のまとめ 207

第2節 心的カテゴリーの脱構築 209

第3節 文化的実践, 慣習, 社会制度 210

第4節 フィールドワークの魅惑 212

第5節 おわりに 214

引用文献 215

人名索引 231

事項索引 233

装幀：新曜社デザイン室

装画：高田 明

1999)を通じて社会的リアリティが形づくられていく過程に注目する。こうした相互行為の分析では、以下のように考える。行為の意味は、身体の物質的な基盤、たとえば生理的な過程や脳内の神経過程によっては定まらない。それはむしろ、相互行為のなかで提案、交渉、構成されるものである。たとえば、ある人による「暑いね」という発話は、その聞き手が窓を開けることによって、提案あるいは依頼という意味を実現している。私たちの社会的リアリティは、こうした意味のやりとりの積み重ねによってなりたっている。そして「心」と「文化」はいずれも、そうした社会的リアリティの一側面をあらわす素朴な、あるいは民俗的な範疇 (folk category) である。こうした視点をとれば、「心」と「文化」は日常的な相互行為において出会う。こうした主張をこれまでの文化人類学の関心に寄り添いながら具体的に展開しようとするのが、本書でいう「相互行為の人類学」である。相互行為の人類学は、(1)人類学における言語人類学、言語的社会化論 (e.g., Duranti 1997; Duranti et al. 2012) から発展しつつあるアプローチで、(2)発達心理学や社会心理学における社会・文化的アプローチ (e.g., Bruner 1990/1999; Kaye 1982/1993; Rogoff 2003/2006), (3)社会学におけるエスノメソドロジーと会話分析 (e.g., Schegloff 2007; Sidnell & Stivers 2012), (4)言語学における語用論 (e.g., Levinson 1983/1990) などの研究分野と親和性をもつ。ただし、相互行為の人類学はそれぞれ、文化そのものを説明しようとする、文化的多様性に立脚した考察をおこなう、コミュニケーションにおける言語以外の要素も重視するといった点で上の(2)~(4)の研究分野とは異なり、ユニークな分野を構成する。

第2節 人類学と心理学の関わり^[1]

日常的な相互行為の分析を通じて「心」と「文化」を結びつけるというアプローチは、心理学と人類学を架橋する試みでもある。じつは、心理学と人類学はそのそもそもの成り立ちにおいて深く関わっている。たとえば、近代心理学の創設者とみなされるヴェント (Wundt, W.) は、感覚・知覚・判断などをあつかう実験心理学と人間の文化的産物などをあつかう民族心理学を補いあうものと考えていた。そして、フィールドワークにもとづく近代文化人類学を確立したマリノフスキー (Malinowski, B. K.) は、一時このヴェントの下で学んでいた。だが、その後の長い研究史のなかで、心理学者と人類学者の協力は、ひかえめにいっても不十分なものであった。その最大の理由は、心理学で問題となるほとんどの論点において、その文

[1] この節は高田 (2003a) の一部を本書のために大幅に改稿したものである。

化との関係を考えるための資料が不足していたことだろう。心理学の資料は、たいいてい「先進国」の一部の層から得られており、それ以外の人々の姿はほとんど反映されてこなかったのだ。

一般に、先進国とは経済や産業の近代化をいち早く成しとげた国々のことをさす。そして、研究者の間では近代化の特質とその意味をめぐってさかんな議論がある。たとえばギデンズ (e.g., Giddens 1990/1993) は、近代が生みだした生活様式は伝統的な社会の秩序をこれまでにないかたちで拭いさり、それにとまなう変化は日々のあり方のもっとも私的な側面にもおよんだと考える。このように近代とそれ以前とを分けてとらえる議論にそくせば、さまざまな社会的行動について先進国でとられてきた解釈をそのままそれ以外にもあてはめることができるとは限らない。

いっぽう、民族、国家、文化について研究してきた人類学は、それぞれの社会で人々が経験する環境の多様性を示してきた。こうした研究では、ある文化のものさし(あるいは諸概念)を発見し、それをもってその文化を記述することが勧められてきた。これは文化の全体をその内側から明らかにしていくためのアプローチであり、人類学とは前提を異にする心理学のさまざまな議論に対して有益な批判を提供してきた。それでも、人類学者が心理学者と共通の基盤に立って文化と心の関係についての議論を積み重ねていくことは難しかった。その最大の理由は、近年の人類学で影響力が大きかった理論が、社会を個人の集合に還元することはない、いかにえれば方法論的個人主義をとってこなかったという点ではほぼ共通していたことにある。このため、おもに個人に分析の焦点をあてた「心」の成り立ちや働きが議論の主題となることはあまりなかった。

ただし、「文化とパーソナリティ論」といわれる立場は、人類学では少数派ではあったが一貫して「文化」と「パーソナリティの形成」の関係を扱ってきた。箕浦(1984)のまとめによれば、この立場は精神分析学の影響を強く受けて誕生した。また1960年代ごろまでは諸文化を「大きく書かれたパーソナリティ」ととらえ、人は自分の文化の写しを社会化の過程で獲得すると考える傾向が強かった。しかし、こうした議論はそのころ精神分析学とは対立していた心理学の主流とはかみあわなかった。心理学者の多くには、精神分析学や文化とパーソナリティ論の研究は厳密なデータに基づいておらず、真偽のほどを確かめようがないと映ったのだろう。

そして、心理学者と人類学者はお互いに疎遠になっていった。儀礼研究や認識人類学の発展に大きく寄与してきたブロック (Bloch 2005:1-19) は、「人類学者はどこへ行ってしまったのか?あるいは「人間の本質 (Human Nature)」の必要性」という印象的なタイトルのついたエッセイのなかで、心理学者が文化と人間の本質の関係を追究するために協働できる文化人類学者がみつかりにくい現況について述べて

いる。人類学はその発足当初、諸学問の知を結集してヒト／人間の特徴を総合的に明らかにしていくという目標を高らかに掲げた。そして文化人類学は、そのうち人間の精神能力のさまざまな集合的発現を研究する役割を担うとされた (Sperber 1982/1984:10^[2])。しかし、こうした総合的な考察を展開した人類学的な研究は、実際にはきわめて少ない (Bloch 2005:1-19; Sperber 1996/2001:27,72,95-97)^[3]。またブロック (2005) によれば、文化人類学は、上記の目標との関連では期待された役割を十分に果たしてこなかったばかりではなく、さまざまな批判を経て、この目標に連なる試みをその研究の主流から放逐してしまった。

もともと、初期の人類学が掲げた目標の意義が失われたわけではない。実際には、人類学の隣接分野である霊長類学 (e.g., 山極 2008), 行動生態学 (e.g., Hewlett & Lamb 2005), 比較認知科学 (e.g., 藤田 1998) などが、「人間の本质」を追究するために種間・文化間を比較するフィールド研究をおこなってきた。その結果、現在ではこれに関わる新たな知見が急速に蓄積されつつある。さらに、大きな物語としての「進化」が復権を遂げている。ただし、この場合の力点は人間社会の進化ではなく、霊長類におけるホミニゼーション (ヒト化) を視野に入れた「人類社会」の進化である。こうした状況で人類学者は、上記の隣接分野の同僚たちと協働しつつ、独自の観点から上記の目標に貢献をおこなっていくことが可能だと思われる (Takada 2016a)。個人と社会を結ぶ相互行為論的な見方からこれをおこなおうとする相互行為の人類学は、そのなかの有力なアプローチである。

第3節 内容の概要

本書では、相互行為の人類学の魅力を初学者に伝える、概略的であるとともに凝集された内容を目指している。そのために、それぞれの章では人類学や心理学における代表的な研究領域を選び、その領域について相互行為の人類学のおもしろい研究成果を紹介する。とりあげる研究の多くは、筆者自身のフィールドワークにもとづくもの、あるいはその領域の代表的なものである。さらに第2～7章の末尾には、読者の興味に応えるために、筆者のこれまでの講義で得られた質疑などを反映させた Q&A 欄を設けた。

[2] 原著と訳書の刊行年が併記されていて引用ページがあげられている場合は、とくに指定のない限り訳書のページを示している。

[3] この点でクロード・レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss) は、現在の文化人類学におけるその論考内容の評価や影響はどうあれ、まれな例外である。レヴィ＝ストロースは、具体的で変化に富む現れとしての文化的多様性の底には、それを支配する抽象的かつ等質的構造としての人間本性が横たわっていることを示そうと努力を傾けた (Sperber 1982/1984:139)。

全体の構成案は、次のとおりである。

第1章「相互行為の人類学への招待」（本章）では、本書の主旨および相互行為の人類学の概要について記す。具体的には、歴史的にみると心理学と人類学は深く関わって成立したこと、しかし現在では両者の協働は十分でないこと、そうした協働を可能にするアプローチとして相互行為の人類学が関心を集めていることなどを論じる。

第2章「理論と方法」では、相互行為の人類学を基礎づけている理論的な考え方およびその研究方法について解説する。本章でも述べたように、相互行為の人類学では、「文化」と「心」の相互構成過程を明らかにするために、相互行為がどのように組織化されているのかについて経験的な分析を行う。これによって、(1)「心」に関わる現象を文化的な次元から見直し、再評価すること、および(2)文化的文脈を解体することが可能になる。

第3章「社会的認知」では、認識と文化の関わりについて論じる。前半では、福井(1991)などの民族誌的な報告にもとづいて、時に西欧の科学を凌駕する複雑な体系をもち、さらに社会生活の全体を統合するようなシステムティックな認識体系の例を紹介する。後半では、歴史・文化的に形成された複雑な意味体系を背景にもつ在来の知識が、文化的な実践のなかでどのように組織化されて用いられるのかについて、南部アフリカの狩猟採集民・先住民として知られているサンの民族誌的な事例をあげながら検討する。

近年の人類学では、他者を理解したと主張するという、人類学においては根源的ともいえる営みに対する強い懐疑が広まっている。第4章「他者理解」では、こうした懐疑主義を超えて、相互理解の間主観的な基盤を明らかにしていくような研究の例として、(1)サンにおける、道案内に関する行為のやりとりを通じた相互理解の達成、(2)人とチンパンジーという種間の相互行為のなかで相互理解を達成しようとする事例（もしくはそれに失敗した事例）の分析を紹介する。これによって、文脈が行為を生み、行為が文脈を作る過程について考察する。

第5章「発達と社会化」は、子どもが文化的実践への参加を通じて、その社会・文化における適切な振る舞いに習熟ようになる過程について論じる。(1)まず、これまでの研究では十分に検討されてこなかった相互行為のシステムの個別化された特徴と普遍性の関係について、グイ／ガナの民族誌的な事例をあげながら、その文化的文脈との関わりを中心にすえて論じる。さらに、文化的文脈と養育者－子ども間相互行為の関係についての理解をより深めるために、(2)現代の日本における妊婦を含む家族の相互行為に注目して、子どもの誕生以前にみられる言語的社会化について論じる。

相互行為の人類学で推進するような、さまざまな文化的な環境におけるコミュニケーション場面の分析は、言語、社会組織、文化について統合的なパースペクティブから研究する機会を与えてくれる。第6章「言語とコミュニケーション」では、こうした分析を推進している言語的社会化アプローチのなかから、(1)米国における依存性ジレンマ、および(2)日本における「思いやり」の実践についての研究成果を紹介する。これらは、米国における相互独立的な自己、日本における相互依存的な自己 (Markus & Kitayama 1991) といった、文化と心についてのこれまでの研究による見方に再考をうながすものである。

優れた小説に表現されているような感情は、私たちのリアリティを構成し、それを彩る。相互行為の人類学は、そうした感情を分析し、より深く理解するための指針を与えてくれる。第7章「感情」では、こうした主張を裏づけるために、(1)サンのサオ・カム (文字どおりには“あやす方法”と訳される養育行動) の実践にあらわれる間主観性 (intersubjectivity) の基盤としての感情、(2)日本の養育者と子どもとの間の会話でしばしば用いられる「恥ずかしい」という感情語彙についての研究成果を紹介する。

第8章「結論にかえて」は、それまでの章での論点を整理し、そこから導かれる「文化」と「心」の特徴について論じる。さらに、相互行為の人類学の魅力とこれからとりくんでいくべき課題について述べる。

第4節 本書の成り立ちについて

第1節で述べたように、「相互行為の人類学」は、(1)人類学における言語人類学、言語的社会化アプローチ、(2)発達心理学や社会心理学における社会・文化的アプローチ、(3)社会学におけるエスノメソドロロジーと会話分析、(4)言語学における語用論などの研究分野が交叉するなかで成立してきたアプローチである。本書はもともと、これらの研究分野と関連しており、筆者がその本務校である京都大学で担当してきた講義「こころの科学入門 I」「Anthropology of Interaction」、 「Linguistic Anthropology」、常葉大学 (旧、常葉学園大学) で担当してきた集中講義「比較心理学」「異文化心理学」、九州大学で担当した集中講義「地域共生論」の資料から生まれた。まず、紙幅の制約から個別に名前をあげることはできないが、これらの講義に参加してくださった受講生のみなさんに心からお礼をいいたい。これらの講義において筆者は、大教室で血気盛んな学部生を相手にすることが多かった。このため、できるだけ専門用語を使わないいっぽうで、専門分野を超えた知的好奇心を呼び起こすような話をするように心がけてきた。本書には、こうした講義の内容や成果が

大いに反映されている。これによって、上記の研究分野に関心をもつ大学生や一般の読者が注釈なしで読めるようなわかりやすく、おもしろい入門書とすることを目指している。またこうした経緯を反映して、本書は、相互行為の人類学やそれと関連する研究分野の講義において、教科書や参考書として用いることができるような構成となっている。たとえば、第1章と第8章を各1回、それ以外の章をそれぞれ2回の授業にあって、さらに残り1回を試験等に当てれば、15回程度の授業で1冊を読み切ることになる。ただし、各章はそれぞれ独立しており、授業回数に限られている場合などは、いくつかの章を選択して用いることが可能である。

これらの講義では対面、あるいはコメントシートを用いた積極的な議論が繰り返された。そこで受講生からいただいた指摘やご意見はしばしば筆者の想定を超える鋭いもので、それによって本書の内容は非常に豊かなものとなった。その一端は、先述したように、第2～7章の末尾に設けたQ&A欄に記されている。これに加えて、これらの講義の実施を可能にしてくれた関係者の方々、とりわけ本書の主旨と密接に関わる「こころの科学入門I」を一緒に担当させていただいた内田由紀子、竹村幸祐、長岡千賀、上田祥行の各氏からは、講義中やその前後の議論を通じてじつに貴重なお意見やご示唆を賜った。

また、本書のもとになった筆者自身の研究は、以下をはじめとする研究プロジェクトによって制度的・財政的な支援を受けることで可能になった。ここに記して深謝したい。日本学術振興会特別研究員(DC1)研究課題「サンの人口構造、生業形態の変容が母子関係および乳幼児の発達に及ぼす影響(平成10-12年度, 受付番号: 9614, 研究代表者: 高田 明)」、日本学術振興会特別研究員(PD)研究課題「サンの養育行動および乳幼児発達に関する人類学的研究(平成14-15年度, 受付番号: 00754, 研究代表者: 高田 明)」、科学研究費補助金・若手研究(B)「言語的社会化をめぐる養育者-子ども間相互行為に関する文化人類学的研究: WH 質問-応答連鎖における「アセスメント」についての文化比較から(平成17-19年度, 課題番号: 17720227, 研究代表者: 高田 明)」、科学研究費補助金・若手研究(S)「養育者-子ども間相互行為における責任の文化的形成(平成19-23年度, 課題番号: 19672002, 研究代表者: 高田 明)」、稲盛財団研究助成「サヴァンナの視覚文化: サン社会におけるジェスチャー・コミュニケーションに関する人類学的研究(平成24年度, 研究代表者: 高田 明)」、国立情報学研究所共同研究「養育者-乳幼児間インタラクションにおける相互モニタリング過程の記録・分析手法の開発(平成24-26年度, 研究代表者: 高田 明)」、科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「種間相互理解: ヒト-チンパンジー間相互行為における能力の構成(平成24-26年度, 課題番号: 24650136, 研究代表者: 高田 明)」、科学研究費補助金・基盤研究(A)「教育・学習の文化的・生態学的基盤: リ

ズム、模倣、交換の発達に関する人類学的研究（平成24-27年度、課題番号：24242035、研究代表者：高田 明）」基盤研究（A）（海外学術調査）「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける景観形成の自然誌（平成28-32年度、課題番号：16H02726、研究代表者：高田 明）」基盤研究（B）（特設分野研究）「承認をめぐる間主観性の発達に関する研究（平成29-32年度、課題番号：17KT0057、研究代表者：高田 明）」。

これらの研究プロジェクトに、共同研究者として関わってくださった方々の名前を思いつく限り、あげさせていただく。秋山裕之、安達真由美、池田佳子、池谷和信、板倉昭二、伊藤詞子、井上章一、今中亮介、今村薫、梅津綾子、遠藤智子、大野仁美、大庭健、大村敬一、小川さやか、梶茂樹、梶丸岳、鹿子木康弘、金子守恵、川島理恵、北村光二、木村大治、木本幸憲、姜明江、黒嶋智美、座馬耕一郎、嶋田容子、菅原和孝、杉山由里子、園田浩司、高木智世、高嶋由布子、高田雅代、高梨克也、竹川大介、田代靖子、田中二郎、田中友香理、月浦崇、寺嶋秀明、戸田美佳子、仲尾周一郎、中尾央、中川織江、中川裕、永原陽子、西阪仰、則松宏子、橋彌和秀、比嘉夏子、広瀬浩二郎、深田智、藤岡悠一郎、藤本麻里子、彭宇潔、坊農真弓、増田貴彦、松本美予、丸山淳子、宮田寛章、明和政子、森田笑、安岡宏和、山内太郎、山本すみれ、和崎聖日、Priyanvada Abeywickrama, Leila Baracchini, Alan Barnard, Marguerite (Peg) Barratt, Herman Batibo, Megan Biesele, Maitseo M. Bolaane, Matthias Brenzinger, Penelope Brown, Matthew Burdelski, Asta Cekaite, Andy Chebanne, Kiega Daoqlo, Jonathan Delafield-Butt, Lourdes de Leon, Alessandro Duranti, Donald F. Favareau, Fabia Franco, Mattia Fumanti, Charles Goodwin, Charlie Goodwin, Marjorie Harness Goodwin, Maya Gratier, Clemens Greiner, Tom Guldemann, Bernd Heine, Jan P. Heiss, Antony Hiri, Moipolai Kaingotla, Kuela Kiema, Jenny Lawy, Tshisimogo Leepang, Jerome Lewis, Boatogela Mbopelo, Judi Mesman, Eureka B. Mokibelo, Beth Morling, Elinor Ochs, Dineo Peke, Michaela Pelican, Kedago Podi, Blin Raoul, Philippe Rochat, Isaac Khanx'a Saul, Sheena Shah, Gakeipege Titigo, Colwyn Trevarthen, Kxooki Tuleo, Coby Visser, Hessel Visser, Richard Werbner, Thomas Widlok, Leah Wingard の各氏（それぞれの所属と敬称は略させていただく）である。これらの方々とおこなってきた共同研究は、研究者としての筆者の血肉となっている。このうち筆者がまだポストクの研究生であった頃からその研究活動を親身になって応援し、支えてくれたチャールズ・グッドウィン (Charles Goodwin) 先生は、2018年の3月31日に逝去された。長きにわたり相互行為の人類学を牽引してこられ、関わるすべての人々に協力的であったC・グッドウィン先生の教えは、本書の随所に反映されている。そのご功績を偲び、謹んで哀悼と感謝の気持ちを表します。また、北島由美子、関宏貴、中山恵美、野村貴子、平井

久美, 中山恵美, 下村泰子の各氏は, 事務補佐員・技術補佐員・教務補佐員として, 上記の研究プロジェクトに関わるじつにさまざまな活動を支えてきてくれた。本書の随所にちりばめられたイラストは, 下村泰子氏 (図3-5, 3-6, 4-2, 4-4~9, 5-1, 5-3, 5-4, 6-1~7, 6-9, 7-7, 7-9) および著者自身 (図5-5, 5-6, 7-3~6, 7-8) が, 動画から切り出した静止画をもとに描いたものである。板倉昭二氏および明和政子氏と共同運営している赤ちゃん研究員制度 (https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/~sitakura/infant_scientist.html) は, 筆者らによる日本国内における養育者-子ども間相互行為の調査を制度面で支えてくれている。新曜社の田中由美子氏は, なかなか本書の執筆が進まない筆者を常に温かく, そして忍耐強く励ましてくださっただけでなく, プロフェッショナルな目で本書の構成から細部の表現に至るまでの確かなアドバイスをしてくださった。

最後に, 筆者の日々の暮らしを一緒に支えてくれている理恵, ケン, いるかにありがとうの言葉を伝えたい。この温かい日常生活こそが, 筆者のすべての活動の源である。

参考図書

Bruner, J. (1990) *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

[J・ブルーナー (著) 『意味の復権: フォークサイコロジーに向けて』 京都: ミネルヴァ書房, 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子 (訳), 1999年]

* 認知科学が, 意味の振る舞いの研究に舵を切った記念碑的書物。

串田秀也・好井裕明 (編) (2010) 『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』 京都: 世界思想社.

* エスノメソドロジーと会話分析の理論的・実践的な射程について論じる。

西阪 仰 (1997) 『相互行為分析という視点: 文化と心の社会学的記述』 東京: 金子書房.

* 「文化」と「心」を結ぶ相互行為論のアプローチをわかりやすく解説している。

流の一つとなっている「言語人類学」は、このうちの文化人類学と言語学を架橋する分野として生じてきた。ただし現在の米国では、これら4つのアプローチはそれぞれ独自の学問分野を構成するまでに発展を遂げており、それらの学問分野間の連携は必ずしもよいとはいえない。また現在、人類学関連の学会としては世界でも最大規模を誇るアメリカ人類学会では、文化人類学と言語人類学は40（2018年時点）もあるセクションのうちの2つにすぎない。

はじめに人類学の名称をめぐるこうした入り組んだ経緯にふれたのは、人類学が生々しい政治的な問題にきわめて敏感であることを示すためである。人類学が社会と向き合う場合のこうした姿勢は、やはり心と文化の問題を扱ってきた心理学のそれとはかなり異なっている。そしてこのことを理由の一つとして、人類学と心理学はお互いの視座を広げる可能性をもつのである。以下ではまず、文化人類学や言語人類学の方法論的な特徴について紹介する。これらの特徴は、相互行為の人類学にも継承されており、心理学に重要な貢献をしよう。

第2節 文化人類学・言語人類学の特徴

「村のただ中で暮らす人類学者にとって、鶏の啼き声や太鼓の響きで目覚め、お祭り騒ぎや哀悼の儀には夜通しつきあい、おしゃべりの調子や子どもの泣き方の微妙な変化をも聞きもらすまいとすれば、フィールドワークは24時間活動となる。船頭に河を渡してもらうのを無下に拒否されたということから自分の見た夢にいたるまで、あらゆる出来事は、それについてノートを取り、とりまとめ、写真を撮り、録音すれば、データとなるのである。」（Mead, M. 1977/1984:原著6-7）

このエピソードは、米国の代表的な文化人類学者であったマーガレット・ミード

[2] もともと日本では、文化人類学に関連する組織としては日本民族学会が最も古く権威のあるものとされてきた。学会が設立されたころ、諸学を通じて我が国に影響力の大きかったドイツ語圏にならって民族学という名称が採用されたのである。しかしながら、日本での研究動向を特徴づけるのは、特定の国の研究の影響というよりはその異種混濁状況であろう。日本民族学会は会則第3条で「この会は人類の文化を研究する民族学、文化人類学、社会人類学などの発展と普及を図ることを目的とする」と明記している。日本民族学会の活動にはこれらのいずれの研究動向も少なからぬ影響を及ぼしてきたし、民俗学、生態人類学、地域研究といったアプローチは日本に特有の学問的な発展を遂げている。また日本民族学会は2004年、その設立以来の名称を日本文化人類学会に変更した。その理由は、我が国の科学研究費等の学術体制や大学等での開講科目、専門分野以外の研究者などによって文化人類学という名称がより一般的に用いられてきている現状を鑑み、「教育・研究の場の確保」および「研究者の再生産」を促進するためであった。もっとも、これは学問の内実に変更を求めるものではなく、先の会則第3条は原則的に維持されることが確認されている（<http://www.soc.nii.ac.jp/jse/onjasca/renam/documents/doc01.html>）。